

ロールシャッハ法における父親・母親イメージカード選択の実態

石井 佳葉

1. 問題と目的

人の心を理解する上で、その家族、特に父親・母親との関係性を重視する考え方は古くからある。精神分析を創始した Freud, S. (1913/1969) は、異性の親に対する愛情とそれを脅かす同性の親との葛藤状況に着目し（エディプス・コンプレックス）、同性の親の禁止する機能が内在化されたものが、やがて自己の機能（超自我）として獲得されていくと考えた。これを受けて Klein (1945) は早期の母子関係を基盤とした理論を展開し、対象関係論を発展させている。これらの理論に共通する点は、幼少期からの父親・母親との関係性や相互交流によって形成されたイメージが、その後の対人関係や症状形成に何らかの影響を及ぼすということである。臨床現場におけるアセスメントの段階で、クライアントの意識的無意識的な父親・母親イメージが理解されれば、その後の治療方針や心理療法の展開について予測可能となり、有益であると考えられる。

ただし、無意識的な次元にまたがって存在している父親・母親イメージについて直接意識レベルでの報告を求めるのみでは、抵抗や回避などの防衛的な要素が多分に入り込み、歪められたり不十分であったりする可能性がある。そのため、父親・母親イメージを理解するにあたり、安香（1989）は TAT で作られた物語から、馬場（1968）は精研式 SCT に家族や親子関係の刺激語を追加したものを用いている。また、ロールシャッハ法においても父親・母親イメージに関する解釈仮説が存在する。Bochner&Halpern（1945）はⅣカードの重々しい男性像から父親、Ⅶカードの柔らかさや明るさから母親を関連させ、これらのカードに与えられる反応から両親に対する態度について知ることができると考えた。そもそもロールシャッハ法は、図版のもつ曖昧な刺激から、被検者の不安、葛藤、退行傾向を引き出し、その中での対処の在り方からパーソナリティを理解しようとする心理検査である（馬場・小此木，1989）。得られる情報の豊かさから、Klopfer 法、片口法をはじめ、阪大法、名古屋大学式技法（以下、名大法）、包括システムなど多くの方法論が確立され、アセスメントに寄与する部分は大きいと言える。ロールシャッハ法の実施に際し、父親・母親イメージについても併せて理解できるのであれば、より多角的なアセスメントが可能になるだろう。また、多種の検査実施による被検者の負担増加を防ぐという意味においても、この手続きの発展は意義深いと思われる。そこで、本研究においてはロールシャッハ法のイメージカード選択に着目する。

イメージカード選択とは、限界吟味段階¹において 10 枚のロールシャッハ図版の中から、好き、嫌い、父親、母親などのイメージに合うカードを選択させ、その理由を聴取するというものである。Bochner&Halpern (1945) の解釈仮説を検証する手法の一つとして、多くの研究者に用いられてきたが (Meer&Singer, 1950 ; Rosen, 1951 ; 村上, 1957 ; 坪井ら, 2012 など)、喜納 (1996) はどのカードが選択されやすいかなどの実験的側面よりも、実際の親子関係や自己評価等がどのような形で反映されているのかに着目している。山中 (1975) は精神科入院患者の精神療法の前後にロールシャッハ法とイメージカード選択を実施し、その変化について考察している。また、星野 (1993) は不安を主訴に来談した中年期女性についてイメージカード選択の結果も踏まえて解釈を行っており、臨床事例の理解の一助としている研究報告も散見される。

このように、イメージカード選択が注目される一方で、10 枚の図版のうち、特定の図版を父親カード、母親カードとして解釈を行うあり方には少なからず批判や慎重な意見がみられる。先に紹介した研究においても、IV＝父親カード、VII＝母親カードとする解釈仮説の存在を前提として分析が進められている側面がある。Schachtel (1966) は、父親や母親にまつわる意識的無意識的なコンプレックスがそれらのカードに反映されるという考えに対し、疑問を示している。田中 (1984) もこの解釈仮説を検証した研究を概観し、「肯定的な結果が得られたとしても、このカードに与えられた反応から父親・母親に対する態度に関する情報が導き出せるという結論には直結しない」と述べている。このように、批判的な意見がありながらも、イメージカード選択の検討においては依然として解釈仮説の存在が前提となっている。こうした状況の背景として、イメージカード選択の実施方法や解釈が不明瞭であることがありと考えられる。

イメージカード選択は限界吟味段階における補助的な手続きであると言えるが、その位置づけは各方法論によっても異なるようである。阪大法のマニュアルでは、参考として父親、母親、自分のイメージカードとその理由を尋ねることについて記載されており (辻・福永, 1999)、名大法においては家族イメージを理解するのに有益であるとして、その教示方法や解釈の一例が示されている (名古屋ロールシャッハ研究会, 2018)。一方で、河合 (1964) が訳した Klopfer 法のマニュアルや、片口法 (片口, 1987) においてはイメージカード選択の好き、嫌いカードを選択させる好悪法に関する記載しか見当たらない。エビデンスに基づく手法として近年注目を集めている包括システムにおいては、再テストへの影響からイメージカード選択を含め限界吟味は実施されないことが明記されている (藤岡, 2004)。しかし実際には、Klopfer 法や片口法使用者がイメージカード選択を実施している研究は散見されるし (山中, 1975 ; 八尋, 1998 ; 餅原・久留, 2001 ; 福井ら, 2011 など)、坪井ら (2012) のように、包括システムに準拠しながらイメージカード選択を実施している研究も見受けられる。

このように、先行研究を概観するだけでは、ロールシャッハ法を施行している臨床家の中で、

¹ ロールシャッハ法の手続きは大きく 3 段階に分けられる。自由反応段階において「何に見えるか、何のように思うか」自由に反応してもらおう。質問段階においてそれらの反応について、図版のどこに (反応領域)、どのような特徴から (反応決定因)、何を知覚したか (反応内容) について説明を求める。限界吟味段階は検査者が抱いた疑問について種々の角度から吟味し、解釈や診断の補助的資料とする。さきの二つの手続きに比べて、はるかに誘導的・暗示的・強制的となることが許される。(『新・心理診断法』より)

イメージカードがどのような位置づけにあるのかについて掘むことは難しいと考えられる。そこで、本研究においては、臨床現場の臨床心理士を対象として質問紙調査を行い、イメージカード選択の実施状況を把握することを目的とする。今後の臨床的活用を目指すうえで、現状から見えてくる可能性や課題を整理することは意義深いと言えるだろう。

2. 方法

2-1. 調査対象者：臨床現場において、ロールシャッハ法施行経験のある臨床心理士を対象とした。精神科病院やクリニックなどの医療機関、大学の学生相談室などの相談機関、EAP（従業員支援プログラム）事業の企業に所属する臨床心理士に、筆者から個別に依頼し、承諾の得られた125名に実施した。記入漏れや欠損値のあったものを除く122名を分析対象とした。なお、対象者の使用している方法論（複数回答含む）の分布については、片口法が75名と最も多く、次いで包括システムが22名、名大法が15名、Kloper法が11名、阪大法とその他の方法論が各5名であった。

2-2. 調査内容の検討：ロールシャッハ法における各方法論の概説書と、日本ロールシャッハ学会の機関誌である『ロールシャッハ法研究』等に掲載されているイメージカード選択に関する主な研究を踏まえた上で（表1）、実施状況として「尋ねているイメージカードの種類」、父親及び母親イメージカードの「教示方法」「解釈の視点」を主な質問内容とした。

表1 ロールシャッハ法の概説書及び先行研究におけるイメージカード選択の実施内容

		(1) イメージカードの種類				(2) 教示方法	(3) 解釈の視点					
		好き 嫌い	父親 母親	自分 (自己)	その他		選択 理由	自由反応/ 質問段階	解釈 仮説	情緒的 側面	他カード との照合	SD法
概 説 書	片口法 1987	○				具体的な記載なし	○					
	名大法 2018	○	○	○	○	具体的な記載なし	○	○		○		
	阪大法 1999	○	○	○		具体的な記載なし	○					
	Kloper法 1964	○				具体的な記載なし	○					
	河合隼雄 高橋史郎 1962	○	○	○	○	具体的な記載なし			○			
研 究 論 文	山中美智子 1975	○	○	○		(※詳細は記載なし) イメージに似ていると思うカードがあればそれを示してほしい	○	○	○		○	
	溝渕啓修 片口安史 1984	○	○	○		「“父”“母”という言葉からあなたが受ける言葉にびっくりすると思ったカードを1枚だけ選んでください」	○		○	○		○
	喜納裕子 1996		○	○		「父親、母親などの言葉にもっとも合うと思うカードを1枚ずつ選んでください」	○					○
	西尾ゆう子 2016	○	○	○	○	(※詳細は記載なし) 父親、母親などのイメージと一致するカード	○	○	○	○	○	

(1) 尋ねているイメージカードの種類

好き／嫌い、父親／母親、自分イメージの選択に関して、表1にあげた概説書・研究論文においておおむね実施されていたことから、基本的に尋ねられるイメージであると判断した。また、河合・高橋（1962）の事例では祖父・祖母の選択が求められ、ジェンダーイメージに関する西尾（2016）の研究では男性・女性のイメージカードの選択が求められていた。名大法では「その他（重要な関係者など）」についても記載されており、質問紙においては「その他」とし

て選択肢に含め、その内容を自由記述で回答してもらうこととした。

(2) 父親・母親イメージカードの教示

各方法論の概説書では、具体的な教示の仕方について記載されたものは見当たらなかった。研究論文においても、教示の記載についてばらつきが見られた。「一致するカード」(西尾, 2016), 「ぴったりすると思ったカード」(溝渕・片口, 1984), 「最も合うと思うカード」(喜納, 1996) など教示の文言は施行者によって統一されていないようであった。また、表 1 にはあげていないが、池田(1995)は名大法の解説の中で「あなたの」を付加する場合とそうでない場合の 2 パターンを示しており、田中(1960; 1988)は個別的なイメージの指定の有無が選択結果や解釈に影響を及ぼすことを指摘している。そのため、本研究においては、父親および母親イメージの指定のされ方に着目し、言葉の細かいニュアンスは自由記述での回答を求めることとした。

(3) 父親・母親イメージカードの解釈の視点

名大法の概説書ではイメージカード選択の解釈例が示されており、その他の概説書・先行研究においても選択理由、自由反応段階・質問段階での反応、感情評価等をもとに分析が行われている。選択理由に着目した喜納(1996)は、「図版の形」「図版の色」「反応内容」「快感性」「具体的な人物の外見上の特徴」など 12 の変数に分けて評定しており、溝渕・片口(1984)も肯定／否定的な表現、曖昧な表現など 4 つに分類している。西尾(2016)は選択理由や反応内容に加えて父親・母親カードや性的カードなどの各解釈仮説と関連させて解釈を行っている。特に、母親と自分、自分と女性などイメージカード間の一致／不一致に着目していた点が特徴的であり、山中(1975)も解釈仮説をもとに検討した上で、好悪のカードと父親・母親イメージカードの組み合わせを検討していた。以上より、解釈の視点は主に「選択理由」「反応内容」「解釈仮説」「ほかのカードとの関連」などが考えられ、これらを細分化して複数選択で回答を求めることとした。

(4) イメージカード選択の学習

本研究においては実施状況だけではなく、その前提となる学習段階にも目を向ける必要があると考えた。そのため、イメージカード選択に関する「学習の機会」「学習内容」についても調査内容に含めることとした。

2-3. 調査内容：臨床歴、ロールシャッハ法の施行件数、使用している方法論についての質問に加え、イメージカード選択の手続きに関する知識、境界吟味段階において実施しているイメージカードの種類、父親・母親イメージカード実施の頻度とその理由、父親・母親イメージカードの教示方法、父親・母親イメージカードの解釈方法、父親・母親イメージカードに関する疑問や今後の展望など計 16 項目(うち 1 項目は自由記述式の回答)の質問項目で構成された(表 2)。なお、両親のイメージカードの実施状況や教示、解釈方法に関する項目については、「父親」の部分に「母親」に置き換え、同様の内容を尋ねた。これらの質問紙について、ロールシャッハ法施行歴 30 年以上の臨床心理士に質問紙の内容を検討してもらい、内容的妥当性を満たしていると判断した。

2-4. 倫理的配慮：本研究は、京都大学臨床心理学研究倫理審査会承認のもと行われた。調査結果については集団のデータとして数量的に処理されるため個人情報漏洩の可能性がないこと、調査への協力は自由意志であり、調査開始後であっても中止してよいことなどについてフェイ

スシートに記載した。また、回答及び提出をもって本研究の趣旨への同意取得とみなした。

表2 質問紙調査における質問項目の概要

主な質問内容		選択項目
学 習	1 最初に使用していた方法論	片口法、Klopfer法、名大法、阪大法、包括システム、その他から選択
	2 現在使用している方法論	
	3 イメージカード選択に関する学習の機会	大学、大学院の授業、日本ロールシャッハ学会の主催のセミナー等、その他団体主催のセミナー等、個人の勉強会等、独学、その他から複数選択
	4 イメージカード選択に関する学習内容	教示の内容、カードの提示方法、記録の取り方、選択するまでの時間計測、選択されたカードの解釈方法、選択理由の解釈方法、父親・母親解釈仮説、その他、学んだことはない、から複数選択
実 施 ・ 手 続 き	5 実施しているイメージカードの種類	好き、嫌い、父親、母親、自分、きょうだい、その他のイメージカード選択・理由の聴取において実施しているものを回答
	6 父親・母親イメージカード選択の実施頻度	毎回実施、時間の都合で実施しないことがある、被検者の状態で実施しないこともある、父親・母親が気になる時に実施する、男性・女性イメージが気になる時に実施する、過去にしていたが現在はしていない、過去に実施したことがないが今後してみたい、過去に実施したことはなく今後もしない、から選択
	7 実施していない場合はその理由	実施方法を知らない、解釈方法を知らない、被検者の負担になる、他の検査を通して理解できる、聞き取りで理解できる、実際の父親について理解できない、無意識的な父親イメージについて理解できない、その他から選択
	8 父親・母親イメージカード選択の教示の仕方	あなたの父親・母親／父親・母親／あなたのお父さん・お母さん／お父さん・お母さん(のイメージに合うものを選択してください)、その他から選択
解 釈	9 父親・母親イメージカード選択の解釈の視点	選択している最中の発話内容、選択している最中の非言語的な反応、特定のカードが選択されるか、色刺激のあるカードが選択されるか、濃淡刺激の強いカードが選択されるか、選択理由の内容、イメージカードの自由反応段階／質疑段階／形態水準／情緒的側面、その他から3つを選択
10 イメージカード選択に関する展望や意見などの自由記述		

3. 結果

分析対象者 122 名のロールシャッハ法の施行件数の分布は、10 件未満が 39 名、11 件以上 50 件以下が 34 名、51 件以上が 49 名であり、次の図 1～6 では施行件数ごとの対象者の回答内訳も示した。本研究では初心者から熟練した施行者まで含まれていたが、イメージカード選択に関する回答では特にばらつきは見られなかったため、全体の傾向として分析を行う。以下に、項目ごとに主な結果を示す。

(1) イメージカード選択の学習

質問紙調査においてイメージカード選択の定義を示した上で、「知らない」と回答したのは 3 名にとどまり、残りの 119 名については程度の差はあるにせよ、学習の機会があったと言える。図 1 より、基本的には大学及び大学院における心理検査を扱う授業での学習が中心であり (99 名)、その他には学会や団体、個人主催のセミナー・勉強会、独学等でイメージカード選択法に

触れていることが示された。セミナーに関して、日本ロールシャッハ学会主催のものはほとんど回答が見られず(3名)、それ以外の団体主催や個人のものにおける学習が大半を占めていた。また、「その他」について回答した21名のうち11名が職場の上司や同僚からの指導をあげており、臨床現場も学習の場となっていることがうかがわれた。

続いて、学習内容に関しては複数選択での回答を求め(図2)、「教示の内容」が85名、「選択されたイメージカードの解釈方法」が58名、「呈示方法」が50名、父親、母親カードに関する「解釈仮説」が41名と続いた。その後に「選択理由の解釈方法」「記録のとり方」が示され、「選択するまでの時間の計測」に関しては4名のみであった。なお、「学んだことがない」が14名であり、そのうち9名は現場でイメージカード選択を実施しているとのことであった。

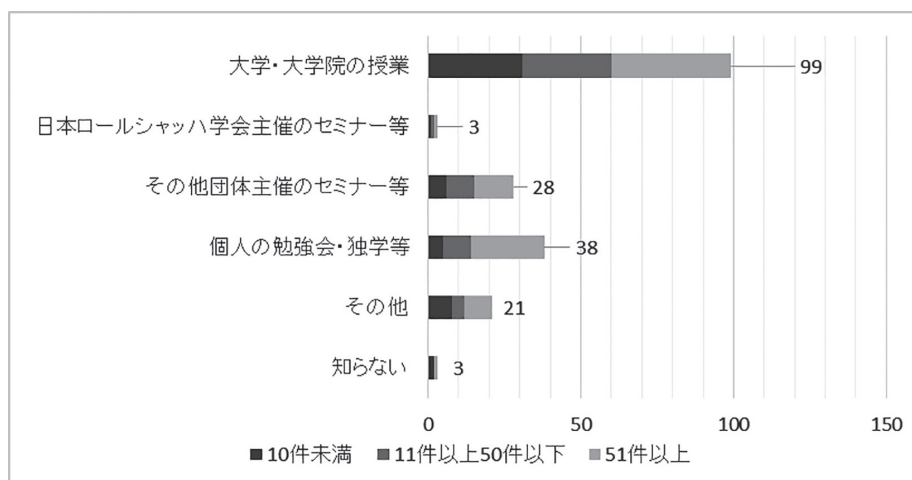


図1 イメージカード選択における学習機会（複数回答）

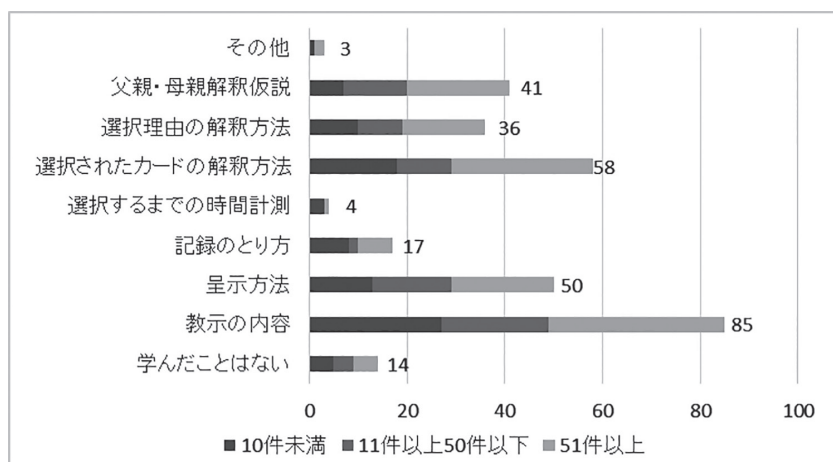


図2 イメージカード選択の学習内容（複数回答）

(2) イメージカード選択の実施・手続き

実施しているイメージカードの種類について、好き／嫌い、父親／母親ではそれぞれ分けて回答を求めたが、同数の結果が示されたためまとめて分析を行うこととした。まず、全体で何

らかのイメージカード選択を実施していると回答したのは 113 名であり、本研究の対象者の 92.6%に上った。なお、「実施していない」と回答した 9 名のうち、6 名は包括システムを用いている対象者であった。

尋ねているイメージの内容について（図 3）、好き・嫌いを実施しているのは 112 名であり、父親・母親、自分のイメージについても選択を求めているのは 90 名程度みられた。さらに「きょうだい」（34 名）、「その他」（17 名）について尋ねているという回答も得られた。なお、「その他」の内訳としては、「配偶者」が最も多く、「家族成員」「子ども」「祖父母」「被検者にとって重要な他者」などであった。続いて、教示方法については「お父さん・お母さん」「父親・母親」について、「あなたの」を冠するかどうかの 4 パターンで回答を求めた。統計的手法を用いた分析結果ではないため確定的なことは言えないが、「あなたの父親・母親」について尋ねる施行者が最も少ない可能性がうかがわれた（図 4・5）。すなわち、「あなたのお父さん・お母さん」、「お父さん・お母さん」、「父親・母親」の 3 つが教示として用いられることが多いと推察された。また、「その他」の回答者では、被検者の発達年齢に応じて「お父さん・お母さん」「父親・母親」を使い分けていることや、教示に「もしあれば」と前置きして選択を強制しないことなどがあげられた。以上より、父親・母親イメージカード選択において教示内容は統一されておらず、各施行者に委ねられている部分が大い可能性が示唆された。

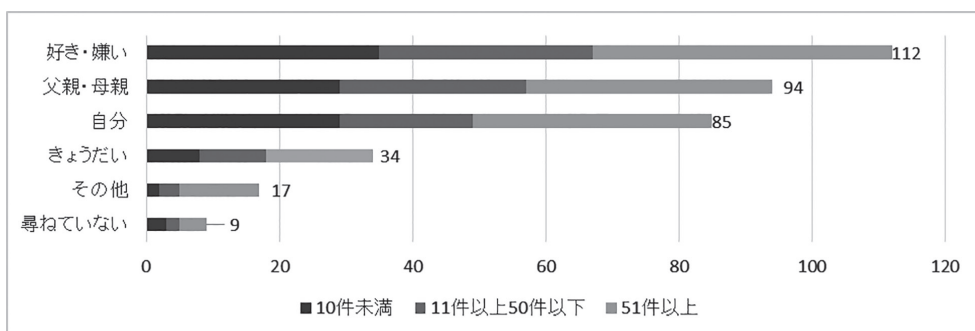


図 3 イメージカード選択の実施状況（複数回答）

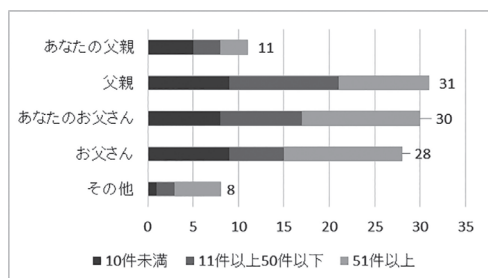


図 4 父親イメージカード選択における教示

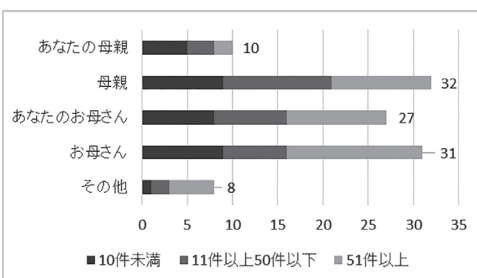


図 5 母親イメージカード選択における教示

（3） イメージカード選択の解釈

続いて、イメージカード選択の解釈上着目しているポイントについて、上位 3 つを選択してもらった。その結果、「選択理由」55 名、選択されたイメージカードの「自由反応段階」、「質

問段階」における反応が 50 名、「選択している最中の発話」48 名、「イメージカードにおける情緒的側面」33 名となった(図 6)。その他には「選択している最中の非言語的反応」24 名、「選択されたイメージカードの形態水準」18 名等が続いた。父親カードと言われる IV カードや母親カードと言われる VII カード、また、色彩や濃淡刺激の強いカードが選択されるかどうかに着目すると答えた人はいずれも 10 名未満であった。

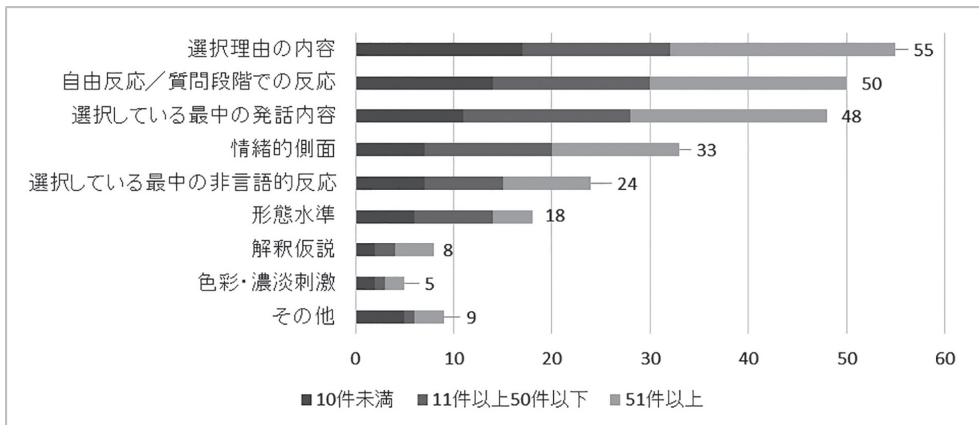


図 6 父親・母親イメージカード選択における解釈の視点

4. 考察

質問紙調査の結果をもとに、イメージカード選択の実施状況やロールシャッハ法施行者にとってどのような位置づけとなっているのか探索的に考察を行うこととする。

(1) イメージカード選択の認知度

イメージカード選択に関する知識について、臨床現場で実施していない人も含めると 97%の人が認知していることが示された。しかし、具体的に学習した内容を問うと「学んだことはない」が 15%となり、学んだことのないまま実施している対象者も 9 名見られた。イメージカード選択施行者全体の 81.1%が大学・大学院の授業で習ったことを回答しており、教育課程での学習が積極的に行われているように思われた。ただし、伊藤・秋谷(1998)のロールシャッハ法の授業内容に関する調査結果からも、授業の中ではロールシャッハ法の実施方法やスコアリングなど基礎的な部分が中心となっていると考えられる。片口(1987)は『新心理診断法』の中で、限界吟味段階は標準的な手続きではなく、初心者の場合には省略してもよいことを明記している。また、好悪法のみ注に記載されており、父親・母親イメージカード選択に至っては一切記載がみられないことから、授業の中では詳細まで扱われないことが推察される。それでも、本調査において高い認知度が示された要因の一つとして、この手続きの特異性があげられる。河合(1964)は限界吟味段階について、検査者が得たい情報について探りを入れることに強調点が置かれているとし、検査状況が「標準化された実験からまったく個別的な場面へと」変わることを指摘している。すなわち、自由反応段階・質問段階では、被検者は検査者から一方的にカードを呈示され、それに反応させられるという基本的な流れが存在する。それに対して、限界吟味段階では検査者が指定したイメージを受け、一度体験済みのカードから選び取る

ことができる。それまで以上に意識水準の介入が大きいものと考えられ、被検者に与えられる自由度は先の2つの段階よりも大きいと考えられる。ロールシャッハ法に触れる者にとって、全体の流れにおけるイメージカード選択の特異性は印象深く残るのかもしれない。

(2) イメージカード選択の実施方法

イメージカード選択に関する学習内容として最も多くあげられたのは「教示の方法」であった。教示の与え方は手続きの要であり、教示一つで全く異なる結果が引き出されるといっても過言ではないだろう。ロールシャッハ法においても、同じ方法論の使用者であったとしても微妙に教示の伝え方は異なると思われる。ただし、自由反応段階では与えられた図版について何に見えるか、どんなふうに見えるか答えること、質問段階では見えたものについて検査者に説明すること、といった主旨は共通している。一方で、イメージカード選択において個人的な父親・母親を指定して尋ねるのとそうでないのでは、被検者に求める反応の質が異なってくると考えられる。「お父さん」「お母さん」は二者関係における親しみのある呼称であり、より個人的な父親・母親イメージを想起させるものと思われる。一方で、「父親」「母親」は主に三者関係の中で用いられ、個人的なものを越えたより広い範囲の意味を含むと考えられる。今回の調査で教示内容が統一されていなかったことの背景として、イメージカード選択の手続きそのものが標準化されていない、補助的な位置づけであることが影響していると考えられた。現状では、手続きが検査者の裁量に任されている可能性が高く、このことは臨床現場では利点と言えるかもしれない。すなわち、アセスメントに際し、検査者側の求める水準に応じて教示内容や実施方法を変更することができると言える。

(3) イメージカード選択の学びの問題

被検者に合わせて柔軟に対応できるというのは利点にもなるだろう。しかし、本来であれば統一されているはずの「教示内容」についてばらつきが生じたことは、施行者間での共通認識の曖昧さを反映しているという批判的な見方もできる。イメージカード選択に関する自由記述では、「改めて問われるまでイメージカード選択の実施について意識したことがなかった」という意見が数名寄せられ、この手続きの自由度の高さが意識的には活かされていない可能性が推察された。この点について、「学習の機会」の回答に着目してみると、施行者のイメージカード選択に関する知識や活用の幅に関する理解が十分ではないように思われた。前述したように授業の範囲では限界吟味段階については簡単に触れられる程度であると推察され、より詳しく学ぶためには専門学会主催のセミナー・研修会などが活用されるはずである。しかし、日本ロールシャッハ学会主催のものを回答したのは3名程度であり、過去の研修会を概観してもイメージカード選択が中心的なテーマとして扱われてきたことはないようである。解釈仮説の検証や事例理解の補助的資料として用いられることはあっても、アセスメントとしてのイメージカード選択の有用性に焦点を当てた研究はほとんど積み上げられてこなかったと言えるだろう。

また、独学や個人主催の勉強会・研修会と並んで回答を集めた「その他」では職場の上司や同僚から指導を受けたことが示された。イメージカード選択の実施に伴い、臨床現場においてはその学習の必要性を感じている人が少なくないと言える。学術的に扱われる場合には、知識や理解が施行者の共通認識として形作られていくが、イメージカード選択に関しては臨床現場ごとに独自の発展を遂げてきた部分があると推察された。

(4) イメージカード選択を通じた被検者の理解

教示内容のばらつきに伴い、得られる反応の水準も多様となるため、解釈の仕方は非常に難しいと思われる。ロールシャッハ法では記号化及び数量化した上で形式分析から内容分析、継起分析と系統立てての検討が可能であるが、イメージカード選択の結果は数量的な処理に馴染みにくい。解釈の着目点では「選択理由」を回答した人が最も多く、名大法や阪大法のマニュアルでは選択理由を尋ねることが推奨されていることを踏まえると、その内容を中心に検討することは妥当だろう。星野（1993）は選択理由をポジティブ／ネガティブに分けて検討を行っており、溝渕・片口（1984）や喜納（1996）は選択理由の内容を細かく分類し、それをもとに親との関係性について言及している。また、高橋（2012）や西尾（2016）は選択理由の内容と選択されたカードのM反応や情緒的負荷をもとに検討している。いまだに選択理由の分析方法について統一した見解は示されておらず、今後はより詳細な検討が必要と思われる。

「選択理由」以外には、「自由反応段階・質問段階での反応」、「選択している最中の発話内容」が解釈の着目点としてあげられた。村上（1957）や福井ら（2011）の研究ではどのカードが選択されるか、解釈仮説に沿って選択されるかどうかが重視されていた。しかし、今回の調査では被検者にとって選択したカードが、何かではなくどのような意味を持つのかに関心が集まっていると考えられた。すなわち、カードそのものの特徴や選択されやすさなど一般的側面を基準とした個人間での比較よりも、個人内でのイメージカードの位置づけを捉えていく方が臨床現場においては主流なのかもしれない。

5. おわりに

本調査では対象者の90%以上がイメージカード選択を実施していることが示され、1945年にロールシャッハ法における父親、母親イメージカードが指摘されて以来、現在まで図版を通じたイメージ理解の視点が引き継がれていると考えられた。イメージカード選択では、一通り知覚し、言語的に説明を行った刺激（カード）を扱うという点で、自由反応段階や質問段階とは異なる性質をもつと言える。さらに、父親や母親、自分など一定の枠組みが与えられ、それに沿って選択を行う。たった10枚のカードに多層的なイメージを当てはめることは簡単ではないが、この意識的な操作が入り込む作業には検査状況を閉じる役割もあるのではないだろうか。馬場（2002）は、ロールシャッハ法のテスト状況について日常場面と地続きであることを強調しながらも、個人的な連想を活性化し、現実検討を弱めて自分の世界へ入り込んでいくことを指摘している。こうした中で、よくわからなかった10枚の図版のうち、数枚でも「わかるもの」として言語化する作業は、被検者の現実検討を引き上げる作業となるかもしれない。筆者の経験では、自由反応段階や質問段階では指摘できなかった赤色刺激の不安や恐怖が、イメージカード選択含め限界吟味段階において、「赤色が血に見えて怖かった」と言語化しておさめられることがある。このように、イメージカード選択が検査状況と日常場面の中間領域のような位置づけとしての意味をもつ可能性について、今後も実証研究や事例検討を並行して行うことで深めていく価値があると思われる。

また、本研究では包括システム使用者の回答率は低かったものの、22名のうち16名はイメージカード選択を用いているとのことであった。統計的処理によって一般の標準値と比較する

視点だけではなく、この手続きにより個人内比較を行うことで、多面的なアセスメントを目指しているのかもしれない。今後は、イメージカード選択の教示内容や解釈方法に関する研究を積み重ね、イメージ選択を通してどのような水準のイメージがどの程度あらわれ得るのか、そしてそこからどのような対象関係が描けるのかについて、明らかにしていくことが必要であるだろう。

謝辞

本研究を進めるにあたり、指導教員の高橋靖恵教授からは多大な助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。また本研究の調査にご協力くださいました医療機関、相談機関関係者の皆様にも感謝申し上げます。

文献一覧

- 安香宏(1989).「TATと家族」臨床描画研究 Annex1 家族イメージとその投影. 金剛出版, pp. 33-43.
- 馬場禮子 (1968). 家族の力動と病理. 臨床心理学の進歩 1968 年度版, 誠信書房.
- 馬場禮子 (2002). 改訂ロールシャッハ法と精神分析——継起分析入門. 岩崎学術出版.
- Bochner, R.&Halpern, F (1945) . The clinical application of the Rorschach test. 2nd.
- Freud, S. (1913). Totem and Taboo. (西田越郎訳 (1969). トーテムとタブー. 人文書院.)
- 藤岡淳子 (2004). 包括システムによるロールシャッハ臨床 誠信書房.
- 福井義一・三宅由晃・岡崎剛・森津誠・遠山敏・山下景子・岡田信吾 (2011). ロールシャッハ・テストの父親・母親図版解釈仮説の図版選択法による検討. 心理学研究, **82**(3), pp. 249-256.
- 星野和実 (1993). 中年期女性の発達とロールシャッハ・テスト:不安を訴えた 2 事例の検討. 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, **40**, pp. 159-173.
- 池田豊應 (1995). 臨床投射法入門, ナカニシヤ出版.
- 伊藤宗親・秋谷たつ子 (1998). 大学における心理検査教育の現状——ロールシャッハ・テストを中心に, ロールシャッハ法研究, **1**, pp. 72-79.
- 片口安史 (1987). 新・心理診断法: ロールシャッハ・テストの解説と研究. 金子書房.
- 河合隼雄 (1957). ロールシャッハ・テクニク入門. ダイヤモンド社.
- 河合隼雄・高橋史郎 (1964). 遊戯療法の前後に施行したロールシャッハ法に言語連想法と併用した例. ロールシャッハ研究, **V**, pp. 168-179.
- 喜納祐子 (1996). ロールシャッハ・テストのイメージ・カードに反映される人物イメージと実際の人物評価との関係——青年の父親・母親・自己イメージ・カード選択に見られる男女差. ロールシャッハ研究, **38**, pp. 113-126.
- Meer, B. & Singer, J. L. (1950). A note on the "father" and "mother" cards in the Rorschach inkblots. *Journal of consulting psychology*, **14** (6), p. 482.
- 溝渕啓修・片口安史 (1984). ロールシャッハ・テストおよびカロ・インクプロット・テストのカード選択法に関する研究, 中京大学文学部紀要, **19** (2), pp. 44-74.
- M.Klien (1945). "Early Stage of the Oedips Conflict", Contributions to

Psycho-analysis, p. 202.

餅原尚子・久留一郎 (2001). 性的虐待 (レイプ, セクハラ・ストーカー) により PTSD 症状を呈した 2 症例のロールシャッハ反応. *ロールシャッハ法研究*, **5**, pp. 53-66.

村上英治 (1957). ロールシャッハ・テストにおける人間関係に関する研究 (1) —— “父親カード” と “母親カード” の分析—. *名古屋大学教養部紀要*, **2**, pp. 1-10.

名古屋大ロールシャッハ研究会 (2018). *ロールシャッハ法解説: 名古屋大学式技法*. 金子書房.

西尾ゆう子 (2016). ロールシャッハ法からとらえた老年期女性のジェンダーイメージ. *ロールシャッハ法研究*, **20**, pp. 32-41.

小此木啓吾・馬場禮子 (1989). *精神力動論——ロールシャッハ解釈と自我心理学の統合*. 金子書房.

Schachtel, E.G. (1966). *Experimental Foundations of Rorschachs Test. New York: Basic Books.* (空井健三・上芝功博訳 (1975). *ロールシャッハ・テストの体験的基礎*. みすず書房.)

高橋靖恵 (2012). *コンセンサスロールシャッハ法*. 金子書房.

田中富士夫 (1960). ロールシャッハ・カードの象徴的意義——「父親カード」と「母親カード」の問題をめぐって. *ロールシャッハ研究*, **3**, pp. 171-185.

田中富士夫 (1984). ロールシャッハ・テストにおける父親・母親カード仮説の諸問題. *金沢大学文学部論集, 行動科学科篇*, **4**, pp. 1-11.

寺崎文香・高橋靖恵 (2003). 青年期の自己信頼感と防衛に関する研究——ロールシャッハ法による接近. *ロールシャッハ法研究*, **7**, pp. 37-50.

坪井裕子・松本真理子・鈴木伸子・畠垣智恵・白井博美・森田美弥子 (2012). 子どものロールシャッハ法における父親・母親イメージ図版の検討. *人間と環境*, **3**, pp. 1-9.

辻悟・福永知子 (1999). *ロールシャッハ・スコアリング——阪大法マニュアル*. 金子書房.

八尋華那雄 (1998). 自己像や現在の状況を如実に投影する女性の事例——RPRS の建設的自我機能から診た母親との関係. *ロールシャッハ法研究*, **1**, pp. 29-44.

山中美智子 (1975). ある精神科入院患者のセルフ・イメージと母親イメージとの関係——ロールシャッハ・テストのイメージ反応の変化を中心に—. *ロールシャッハ研究*, **XVII**, pp. 197-217.

(臨床心理実践学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2018 年 8 月 28 日, 改稿 2018 年 11 月 4 日, 受理 2018 年 12 月 21 日)

ロールシャッハ法における父親・母親イメージカード選択の実態

石井 佳葉

ロールシャッハ法の限界吟味段階で実施されるイメージカード選択について、その使用実態や学習状況を調査し、アセスメントとしての可能性と課題について探ることを目的とした。医療、福祉、産業など臨床現場における臨床心理士 122 名に質問紙調査を実施した結果、対象者の 90% 以上がイメージカード選択を認知し、実施していることが明らかとなった。ただし、教示内容が統一されていないことが示され、各施行者によって異なる水準のイメージを扱っていると考えられた。背景として、専門的な学習機会の不十分さがうかがわれ、教示方法や解釈方法は各臨床現場で独自の発展を遂げてきたことが推察された。手続きや解釈の自由度の高さについては、事例に臨機応変に対応できるという利点が考えられるが、施行者によって意識的に活用されているとはいいがたい。今後はイメージカード選択を通したアセスメントの可能性について事例研究を重ねていく必要があると考えられた。

Selection of Father and Mother Image Cards in the Rorschach Technique

ISHII Kayo

When testing the limits of the Rorschach technique, people are usually asked to select father and mother image cards. Current training in how to use this procedure in Japan was investigated. Furthermore, the potential for growth was discussed. A questionnaire survey was conducted with clinical psychologists in clinical situations, such as the medical, welfare, and industrial sectors ($n = 122$). The results indicated that more than 90% of subjects recognized and conducted the procedure. However, teaching contents were not unified, which indicated that clinicians dealt with images on different levels. It appeared that opportunities for professional training in administering the technique were insufficient. Teaching and interpretation methods were inferred to have developed independently at each clinical site. The high degree of methodological freedom made it possible to deal with cases flexibly. However, clinicians did not seem to use these advantages consciously. Further case studies of the assessment process using image card selection are necessary.

キーワード： ロールシャッハ法、父親・母親イメージカード選択、使用実態

Keywords: Rorschach technique, Selection of Father and Mother Image Card, Actual use